

京鹿子

昭和二十三年九月一日第三種郵便物認可
平成二十一年十二月一日発行
通巻二〇二四号 毎月一四日発行



12月号

— 近 詠 —

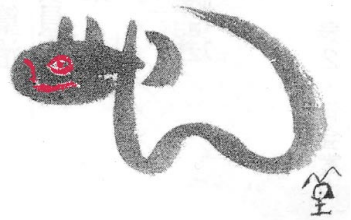
神無月 丸山佳子

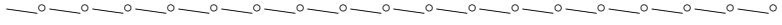
大風呂敷をたたみし思ひ台風消え

柿あかあか日進月歩あそぶ日なし

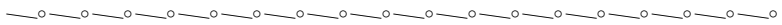
足もとへ何を探しに小春の蝶

言葉より水欲しげなりコスモス園





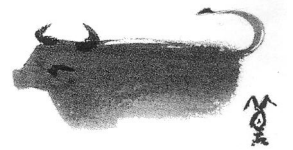
カーブミラーにつくり笑ひをしてくしやみ
神無月いかなお気持宮司さま
杉落葉掃かぬが文化財らしく
晩年の五感清しく神迎へ
山眠り鳩に天与の水たまり
十二月つねに用なきものに用



豊田都峰

漣響集 その四

落 鮎 の 一 閃 山 は 晴 れ 決 め て
鮎 落 ち し ま ろ き 里 山 白 日 上 ぐ
川 も 雲 も ひ と す ぢ と し て 野 分 晴
結 末 は メ モ 一 枚 の 秋 の 雲
灯 を ひ と つ こ ぼ し て 秋 の 夕 焼 果 つ
芦 の 穂 を 発 つ は 日 ぐ れ の 遠 お も ひ



秀華採集

ふりかへる癖かなかなに知られをり

直江裕子

自分の事を外からの視線で見るのは俳句の重要な手法。そして「かなかな」の持つ味わいを描く。実際あの声には人生をさえふりかえらせるものもある。

灯がひとつ通り銀河を深くする

森 茉莉

木の家の木の俎板や涼新た

荒尾 茂子

前句の、小さな人間の営みと大きな自然の摂理との係わり。何かを感じさせれば、それが詩。後句の、いちめんに満ちる新鮮な木の香りは、まさしく「涼」である。

近 詠

忘れ花

鈴鹿
仁

忘れ花風に聴きたし明日のこと
果てのなき鐵路見てゐる帰り花
一村の灯のあたたかし冬用意
句ごころを通してをりぬ文化の日
絵皿よりつぶやきありて文化の日
系露忌二句
不意と謂ふ雲の流れや露しぐれ
句ぼとけに黄葉あかりの道しるべ

神麓集



凱旋門

林

日圓

モンブラン跨げばローマクリスマス
 ローマにて古城めぐりやペチカ燃ゆ
 バリーにてロードシヨウ観る日の短か
 クリスマスバリーの塔は出臍なり
 着ぶくれて凱旋門をくぐりけり

盆休

北村

香朗

仏具屋の吹抜け天井黒揚羽
 十七年の妻を迎ふる盆灯
 孫と意外話ほつほつ盆休
 婚話に至らぬ孫と盆休
 一人残され盆提灯を仕舞ひをり

水軍島

和田

照海

魚となるまで泳ぐ子ら海士の島
 門火焚くはらからといふしがらみに
 送り火のいちばん星へ灯をつけり
 熊蟬のはがね鳴きして水軍島
 峰澄みて鶴待つ里のひとしほに

秋の水

藤岡

紫水

秋の水魚よりも濃き魚の影
 寄す波にそれぞれ秋の水の翳
 爽涼や草の下ゆく水の音
 ふと消えて日だまり残す秋の蛇
 竹を伐る音にかぶさる夕の鐘

蝉時雨

松田

都青

家風には合はぬ真面目さ蝉時雨
 ひと部屋に余分な父とゐる残暑
 秋風や見ずとも解る置手紙
 わけもなく言葉が粘る終戦忌
 小刻みに才が出すぎて夢二の忌

地核ばら

襦寝

瓶史

鯖船のいびきの深し舳ひ綱
 磯小屋のトイレさはやか吊忍
 地核ばら窄みし儘の震源地
 諾・再の茅の輪潜りて神の世に
 海産の供物占む神夏祓

神麓集



すいと秋

北川

孝子

すいと秋自適といへばそうかとも
書いて消すおもひあらたや白露来る
いささかの自負あやふかり吾亦紅
酢の効きしものに箸おく盆の風
水の秋風は生絹の夕べかな

飛車

伊藤

希眸

飛車といひ王手と言ひて虫の夜
優しさの飛礫となりし道おしへ
宇宙飛行秋の彼岸は見えますか
御佛を載せし飛雲や御命講
飛んで火に秋の虫なら避けてをり

冬桜

丸井

巴水

掌にすくふ蠅取蜘蛛の重さなし
瞬きはページを捲る紅葉山
啄ばみの一夜明けたる渡り鳥
蝮姑の鳴く闇のむかうは地獄釜
両眼にじわじわ溢る冬桜

秋の蝶

川崎

光一郎

こぼれ陽に影の漂ふ秋の蝶
浸水の跡しらしらと秋の風
鬼の子の風に揺らるる遊びかな
枝豆や古女房の味加減
天高し水子地蔵の瞳のつぶら

朝詣

荻野

千枝

右肩の露を払ふて朝詣
女郎花風の首筋かぼそくて
篁の竹は伐らねば冥くなる
竹伐つてまた竹売の声となり
秋霖雨出し忘れたるふみしめりがち

大極殿復元讃歌

奥村

鷹尾

奈良宮跡四方金秋の蒼穹に
宮跡の四方の広野に月鎮み
金秋に覆ひ解かれし鴟尾の綺羅
奈良御所の千歳を今に峰雲立つ
宮跡の町騒鎮む四方の秋



京鹿子集

豊田都峰選

晩夏まだ乳房は風を見てゐない

千葉 直江 裕子

ふりかへる癖かなかに知られをり

木の家の木の組板や涼新た
肥後朝顔葉に峠の張りのあり

荒尾 荒尾 茂子

稲魂に胸のボタンをとばされる

初萩や制服の子の背丈伸び

夫まですます遠い夜の秋

女郎花二度咲きの顔保ちをり
びらびらと秋海棠の気ままなり

鉛筆が消えた身ほとりすべりひゆ

日米の光景は似て休暇明け

うしろかげとみにはかなし夢は穂に

枚方 森 菜明

伊吹 之博

打ち据えし残り蚊に血の臭ひせず

審査待つ若きドクター落花生

訣れの手振れば生命線霧らふ

荒野にて祖先を祀る秋彼岸

灯がひとつ通り銀河を深くする

扇持つ指先に品菊の宴

死にかたがこんな手近にまんじゅしやげ

指折りて秋雨を待つ砂漠町